

## ドイツ女子サッカーの発展に関する一考察

長谷川 望

愛知東邦大学

## ドイツ女子サッカーの発展に関する一考察

長谷川 望

### 目次

1. はじめに
2. ドイツの育成改革
3. 女子サッカーの育成
4. 考察
5. おわりに
6. 謝辞
7. 参考文献

### 1. はじめに

2014年に開催された、サッカーW杯ブラジル大会において、ドイツ代表が準決勝でブラジル代表を相手に7対1という衝撃的なスコアで勝利した。そして、決勝戦では、世界最高峰のプレイヤーであるリオネルメッシ率いるアルゼンチン代表に延長戦の末に1対0で勝利し、史上4回目の優勝を果たしたのは記憶に新しい。その優勝は偶然ではなく、ドイツサッカー協会（Deutscher Fußball-Bund 以下、DFBと略記）がサッカー選手の育成に力を注いできた証といわれている。W杯ブラジル大会に優勝したドイツチームの選手のうち9選手が2008年に開催されたU-19ヨーロッパ選手権（Europameisterschaft 以下、EMと略記）、2009年に開催されたU-17、U-21EMのいずれかにおいて優勝を経験している。また、ドイツ女子代表については、FIFAランキング2位（2016年3月19日発表現在において）の座についており、2014年に開催されたW杯U-21優勝、2015年の女子W杯カナダ大会において4位という成績を残している。このように、ドイツは男女代表チームとも近年の活躍は目を見張るものがある。しかし、ドイツのサッカーが順風満帆に発展し続けて来たわけではない。ドイツ代表は、1990年W杯イタリア大会優勝、1996年に開催されたEMに優勝した。それ以降、代表チームの戦績もふるわず、若手の台頭も見られず、2000年に開催されたEMにおいては、予選敗退という屈辱を味わった。その敗戦を契機に、DFBは、2002年に代表チームの強化、立て直しを図るうえで長期的な視野に立ち「ドイツタレント育成プログラム」<sup>1) 2) 3)</sup>を立ち上げ育成改革に着手した。その育成改革は、1. タレントセンターの設立、2. クラブ指導者への情報提供及び講習、3. 学校との連携の推進、4. 各ユース年代のナショナルチームの強化の4領域から構成されている<sup>4)</sup>。

我が国においても、DFBの改革を参考に指導者養成、選手の育成に着手してきた。とりわけ、女子サッカーにおいては、「なでしこvision」<sup>6)</sup>を掲げ長期的な展望を持ち、着実に育成環境を整

え、様々な取り組みがなされ、急速な発展、成果をあげてきた。また2015年の女子W杯カナダ大会後には、「なでしこvision」<sup>6)</sup>の総括を行い改めて目標を定めている。しかしながら、2016年リオオリンピックアジア最終予選において、日本代表女子サッカーチーム（以下、なでしこジャパン）は、本大会出場を逃した。今後も、なでしこジャパンが世界のトップに君臨し続けていくためには、現在までの取り組みを地道に続けていくことに加え、新たな目標を達成するべく具体的な改善が必要であろう。そこで、本研究においては、日本サッカー協会が参考にしてきたドイツの育成改革やほとんど取り上げられていないドイツの女子サッカーの発展について各協会のホームページ、報告書やインタビュー等をもとに検討し、今後の日本の女子サッカーのさらなる発展を考えるうえでの一助とすることを目的とする。

## 2. ドイツの育成改革

ドイツ代表は、2000年に開催されたEMにおいては、予選敗退という屈辱を味わった。その敗戦を契機に、DFBは、2002年に代表チームの強化、立て直しを図るうえで長期的な視野に立ち「ドイツタレント育成プログラム」<sup>1) 2) 3)</sup>を立ち上げ育成改革に着手した。育成改革においては、いかに示す4つの領域からなるタレント育成を実施している。1. タレントセンターの設立、2. クラブ指導者への情報提供及び講習、3. 学校との連携の推進、4. 各ユース年代のナショナルチームの強化であった<sup>4)</sup>。第1の領域「タレントセンターの育成」の柱は、ブンデスリーグ1部、2部に所属する全チームへのユースアカデミー設立の義務化とドイツ国内全土366か所へのStützpunkt（育成拠点）の設置の2本柱であった。366か所の拠点では、各地域に潜んでいる才能を持った選手（以下、タレントと表記）を週1回集め、各カテゴリーのタレントに対して技術・戦術に関わる個別的レベルアップに主眼をおいたトレーニングを実施している。また、各拠点においては、DFB公認の指導者ライセンスを保有し、DFBの推薦を得た指導者がDFBの統一的な育成コンセプトに基づいてトレーニングにあたっている。その拠点の指導者の数は1000人にも及び、優秀なタレントを見落とすことがないようになっている。

さらに、このプログラムにおいては、ドイツ全土で29人の「拠点コーディネーター」という専任職が配置されており、地域の育成拠点とDFB及び各州サッカー連盟とのつなぐ役割を担っている。拠点コーディネーターは、原則的に最高位の指導者ライセンスを保有し、各拠点のトレーニングの責任者と成り、各拠点の指導者への講習会の実施、各拠点の指導者が適切なトレーニングを実施しているかのチェック等を実施する。また、各拠点の指導者とともに、拠点トレーニングに参加するタレントの所属クラブの指導者に情報提供や講習を行う役割も担っている。第2の領域「クラブ指導者への情報提供及び講習」の取り組みとしては、DFBホームページ上でのトレーニング方法の紹介、先述した各拠点を中心とした指導者講習会等が挙げられる。そして、それらの情報は手軽に得ることができ、多くのクラブの指導者が、講習会に参加することが可能と成っている。実際に筆者が参加した、講習会においても、男子チーム、女子チームの様々なカテゴリーの男性指導者、女性指導者が参加していた。第3の領域「学校との連携の推進」は、東部ドイ

ツ地域のスポーツ重点学校とプロクラブとの連携や西部ドイツ地域の学校、クラブ、各州サッカー連盟による連携の推進といった課題に取り組んでいる。第4の領域「各ユース年代のナショナルチームの強化」は、トレーニングキャンプの実施、DFBスタッフによるタレント発掘システムの整備・再編などが挙げられる<sup>4)</sup>。

### 3. 女子サッカーの育成

DFBは、ドイツ女子サッカーの育成の重要な要因を①育成プラン、②プレー機会、③ゴールクリエーティング、④コーチ、⑤パーソナル、⑥新しいアイデア、⑦コミュニケーション／マーケティング、⑧ナショナルチームとしている<sup>5)</sup>。男子のタレント育成プログラムに準拠するかたちで、2005年に始動した育成プランにおいては、地域でのタレント発掘、育成、選抜チームによる試合、メンバー選考、ナショナルチームへという一連の流れができています。Mittelrhein地域(ライン川中流域)を例に挙げると、Mittelrheinの地域の中に3つのTalentförderzentrumといわれる地域のタレント育成の拠点がある。そのうちの一つの地域拠点の練習風景を図1、図2に示した。



図1 U-14 練習前の集合風景  
(筆者撮影 2016年3月15日)



図2 U-16 練習風景  
(筆者撮影 2016年3月15日)

筆者の調査対象の地域のタレント育成の拠点には、1.FC Köln と Bayer 04 Leverkusen という男子ブンデスリーグに所属するクラブが持つ女子チームがあり、大半の選手はいずれかのクラブの所属である。他は、地域の女子クラブの選手又は、男子クラブに所属しプレーしている女子選手が数人参加していた。数人の地域の女子クラブの選手や男子クラブに所属している選手が、この地域の拠点での練習に参加できていることが非常に重要なことである。このようなタレントを発掘し育成することこそDFBの育成コンセプトである。また、図3に示した写真は、各地域の選抜チームが集まり試合をし、DFBの指導者が良い選手を発掘するという風景である。各地域は、それぞれのトレーニングウェアを着用し、誇りをもってプレーしているように感じられた。この大会で特に目についたのは、女性指導者の数の多さであった。女子育成プランの重要な要因として、④コーチをあげているが、着実に女性指導者の育成を図っていることが伺える。当然のことながら、女性指導者もDFBライセンスを保有し、推薦を受けた指導者であり、DFBの統一的な育成コンセプトのもとトレーニングを実施している。そして、図4に示した写真は、1FC Kölnの育成年

代のトレーニング風景である。Mittelrheinにある男子ブンデスリーグに所属するクラブの女子チームということもあり、ハード面や指導者というソフト面において質が確保されていた。また、男子チームや女子のトップチームをはじめとする他のカテゴリーの練習を間近で観察することができ、近くにモデルがあることはタレントの育成にも大いに影響を及ぼしていると考えられる。



図3 選抜チームの試合  
(筆者撮影 2016年3月17日)



図4 1FC Köln 女子練習風景  
(筆者撮影 2016年2月25日)

#### 4. 考察

本研究において、育成改革に成功し、日本型の育成システムの構築のために参考にしてきたドイツの育成について検討した。また、ドイツの女子サッカーの育成の現場に触れ感じたことは、ドイツを参考にしつつ「なでしこVision」を掲げ、日本型の育成システムに取り組んできた、日本の育成はドイツの育成と比較しても見劣りしないものであるということである。しかし、ブンデスリーグ所属クラブが、女子チームを持っているということもあり、ハード面、女性指導者の雇用というソフト面においては、ドイツの仕組みにヒントがあるように思える(図4)。男子ブンデスリーグ1部(2015-2016シーズン)に所属する全18クラブのうち半分の9クラブが女子チームを持っている。また、その9クラブのうち7クラブが女子ブンデスリーグ1部に所属している。一方なでしこリーグに所属する全10クラブ(2016シーズン)のうち男子J1リーグに所属するクラブの女子チームはわずか3チームである。そして、男子J1リーグ(2016シーズン)に所属するクラブのうち女子チームを持っているのがその3チームのみである。このことから考察すると、男子チームを持っているクラブの女子チームは、ハード面に加え、ソフト面も充実しており、金銭的にも恵まれており優秀なタレントが集まりやすくなっていることが伺える。J1クラブがユースに加え、なでしこリーグに所属するチームを創設することでよい環境でサッカーを続けることが可能となり女子サッカーのさらなる発展につながると考えられる。或いは、他のかたちでJクラブが女子クラブと連携・協力することで更なる発展が期待できる。また、「学校との連携の推進」の観点から考察すると、日本独自の部活動という学校教育と連携を強化することで、競技人口の増加、女子サッカーの発展に大きく影響を与えると考える。しかし、現在学校部活動も多くの問題を抱えているため、新しい仕組みづくりが重要となるであろう。

## 5. おわりに

ドイツ女子サッカーの発展についての考察より、今後、日本の女子サッカーがさらに発展していくために必要な要素を抽出することができた。Jリーグの各チームが女子サッカーチームを創設、或いは他のかたちで女子クラブと連携・協力していくことが重要となろう。また、「学校との連携の推進」の観点から考察すると、日本独自の部活動という学校教育と日本サッカー協会、Jクラブ或いはなでしこリーグ等が、連携を強化することで、競技人口の増加、女子サッカーの発展に大きく影響を与えると考える。現在までの取り組みを継続するとともに、新しいシステムが構築され、日本の女子サッカーがさらに発展することを願い本研究のまとめとする。

## 6. 謝辞

本研究を遂行し、まとめるに当たり多くのご支援とご協力を賜りました。ドイツにて実際に女子サッカーの現場を肌で感じ、研究をする機会を与えてくださった大学関係者、生活や研究に際してご協力を頂いた全ての方々に心より感謝申し上げます。

## 7. 参考文献

- 1) DFB Talentförderprogramm  
<<http://www.dfb.de/sportliche-strukturen/talentfoerderung/einfuehrung/>>
- 2) DFB Talentförderung der Verbände  
<<http://www.dfb.de/sportliche-strukturen/talentfoerderung/einfuehrung/>>
- 3) DFB]Trainer C-Lizenz (2016) 講習会資料
- 4) 藤井雅人・乾真寛 (2004) 「ドイツサッカー連盟タレント育成プログラム－2002年施行の最新プログラム内容と特色－」 日本体育学会大会号(55). 629
- 5) 一般社団法人日本トップリーグ機構  
<[http://japantopleague.jp/column/overseastraining/doc/overseastraining\\_0005](http://japantopleague.jp/column/overseastraining/doc/overseastraining_0005)>
- 6) なでしこビジョン <[http://www/jfa.jp/women/nadeshiko\\_vision/nadeshikovision.pdf](http://www/jfa.jp/women/nadeshiko_vision/nadeshikovision.pdf)>

受理日 平成28年3月31日